

# 中屋村誌

## 第一編 中屋村沿革

### 第一 往時の中屋村

元今中屋村の南を流るゝ木曾川は、往時鶉沼以西は美濃（厚見 各務）と尾張（丹羽・羽柴・中島）との間を流れしものにして、日本地名辭典に「廣野ノ河口扯」として、

今中屋村と稲葉郡各務野との間とす、廣野とは各務野の別名にして其の南邊を過ぎしを以て此名あり、即ち木曾川の舊道にして今の堺川の筋を云ふ、凡此河口より墨俣まで五里。

木曾川は各務野鶉沼渡に於て山谷を離れ、前渡以下に於て全く平岨の地につく。故に河流の遷移は、歴世此前渡（魔免戸）以下に起る。舊史に傳ふる所、神護景雲三年に廣野の河口擁塞して、其の南に新道を生ず、謂ゆる尾張害ふてふ諺は此時

より起る。續記、神護景雲三年九月「尾張國言へらく、此の國美濃國の堺に鵜沼川あり、今年の大水に其の流れ道改まる、毎日葉栗中島海部三郡の百姓の田宅を侵損ず（中略）望み請ふ解工使を遣し、開き堀りて其の舊道に復せんと、之れを許す」とあるは此の河道の東南遷せる初發の事状とす面も開堀復舊の工役を起し、河道北に遷りしも、其の後、洪水に又東南遷したる事は三代實録に載せ、貞觀中の事とす。貞觀七年十二月「尾張國言へらく、昔廣野河美濃國に向ひしに、此時に當て百姓に害無かりき然に頃年河口擁塞して總じて此國に流れ落つ、雨水に遇ふ毎に動もすれば巨害を被る、望み請ふ、河口を掘開して旧琉に赴かしめんと、尾張國言へらく、太政官の依る」とかくして、廣野の河口を掘開し、旧流に赴かしむ、而して美濃國各務郡の大領各務吉雄、厚見郡の大領各務吉宗、兵衆歩騎七百徐人と率る、河口を襲来し、郡司を鷗傷し、役夫を射殺し、河水血を流し、草膏に霑ふ、功成り將に畢らんとす、るに此妨害に遭ふ、是に至り、彼此相持せば、濃國司に畢らんとす、ふ、河流利害、兩國争論して、彼此相持せば、濃國司に畢らんとす、

ず、是に於て重ねて勅使を遣して、両國司を相共に勘へ定め、  
更に復、朝議其の得失を審かにし、両國に下知して堀開せし  
め、功役己に發り。作事稍成らんとするに及んで多く兵仗を與  
し、吏人を鷓傷し。血を流す、郡司の無状と言ふと雖も抑ふも亦  
國吏の失なり。静に之を言へば理豈然らざらんや、宜しく早  
く掘開せしむべし。又擅に兵衆を與したること法禁是重し。  
而も其の数七百に過ぎ、害殺傷に及ぶ。須く乱首吉雄等を禁  
固すべし。兩國司相共に死傷の人数を録し、實に依つて言上  
せよ。と見え、遂には二十日、尾張國司に下知して、暫く河口  
堀開の事を停む。海部郡を浸して、新河道を生じたりと知るべ  
し。云々と。中屋村の状態もこれよりして略し、想像に難  
し。千年前に於ける中屋村の状態もこれよりして略し、想像に難  
し。からざるべし。而して木曾川の氾濫、河線の變遷、實に極  
りなくして、之が枚舉に遑なし。  
二天正十二年豊臣秀吉、尾張國たりし葉栗、中島、海部の百  
二三十餘村を割きて、美濃國に屬せしむ。その原因に至つては  
二三稱せらるれども、木曾川の變轉より來れるものなりとい

うふに近からん。後二年「天正十四年美濃尾張洪水にて葉栗中島両郡の内村里流出し今の木曾川筋となり云々」(尾張葉栗見聞録)にて知る如く、天正十四年より木曾川は遂に本村の南を流るゝに至りたるものなり。

其の後木曾川洪水に於ける堤防の決潰は度々にして、本村内にて「承應二年己七月朔日(今より二百七十五年前)本本の堤切るゝ」(美濃誌)あり、ために、當時の面目は、貝原篤信(益軒)の岐担路記に曰く「野(各務野のこと)の南に三井山と云ふ山あり、其山の南木曾川のきはまで野有り云々」と以て知るべし。

要するに本村は木曾川のために、その一部、時には水みなざる河底となり、時には土砂の堆積する所となりしなり。宜なるかな今に至るも其の状の歴然ものあり。